

平成 29 年度「学生による大学改革アイデアコンテスト」の審査結果

教育・学生担当副学長

本コンテストは一昨年まで「福島大学学生論壇賞」の名称で実施していたもので、応募数の低迷（平成 24・25 年にそれぞれ 1 篇、平成 26 年に 10 篇、平成 27 年に 3 篇）が続いていました。昨年度からこの名称に変更し、評価指標を明確にするとともに、形式や文量を柔軟にしアイデアの大小を問わない形に変え、実施しています。

本年度の応募は、人間発達文化学類のスポーツ分野の 2 クラスが教養演習の課題として採用したことが起因し、応募総数が 53（前年は 9）篇と飛躍的に伸び、その内訳は、大学院生 2（前年は 2）篇、学類生 51（前年は 7）篇でした。大学改革への学生の参画を促していただいた当該クラスに対して、感謝申し上げます。

審査に当たっては、①本学の持続的な発展に資するものであること、②学生の視点によるユニークさ、③実現可能性、④何らかのデータ（アンケート、先進事例など）に基づいていること、⑤内容のわかりやすさ、の 5 つを評価指標として、審査員が評価しました。結果は以下の通りです。

最優秀賞 該当なし

優秀賞 ○経済学研究科（131670010） 我妻芳徳

「福島大学生協改造計画の提言～他大学校内コンビニエンスストアの経営の事例から考える～」

○人間発達文化学類（111730001） 浅野優雅

「食品残飯の堆肥化システム」

佳作 ○行政政策学類（121410074） 今野翔太

「三者自治の理念に基づく学生と職員の交流にかんする提案」

○人間発達文化研究科（111770019） 久保田恵佑

「学生の進路実現に向けた学生主導型就職ワークショップという提案」

全体として、学生の視点によるユニークなものが多く、内容もバラエティに富むものとなりました。得点合計が 5 割を超えたものが辛うじてあったものの、審査員による協議の結果、昨年に引き続き最優秀賞は「該当なし」としました。以下に、入賞作品について講評したいと思います。

優秀賞となった経済学研究科 2 年我妻芳徳さんの「福島大学生協改造計画の提言～他大学校内コンビニエンスストアの経営の事例から考える～」は、本学大学生協の課題をふまえた改革案です。本学の生協は、大学生活を充実させる上で重要な役割を果たしていますが、細かな改善を繰り返してきたために何をメインにしているのかわかりにくくなり、図書館店との棲み分けも曖昧、これに対しコンビニエンス

ストアのノウハウを一部取り入れることで改善できるのではないかとしています。具体的には店舗のレイアウト、接客マナー、地元商品の取り扱いなどの改善で、他大学のコンビニエンスストアの設置事例をもとにわかりやすく提言が成されています。審査委員から大学生協は大学組織とは異なる組織であり、本コンテストの趣旨から少しずれているのではないかとされ優秀賞としました。

同じく優秀賞の人間発達文化学類1年浅野優雅さんの「食品残飯の堆肥化システム」は、食堂で出た残飯を、生ゴミ処理機を利用して堆肥化し、食農学類(仮称)に設置される農地に有機肥料として活用するというアイデアです。筆者は食堂で出る残飯が多いと感じ、これを有効利用してはどうかと考えます。生ゴミの処理には民間業者に委託する方法と、構内に堆肥化装置を設置する方法が考えられますが、それらのメリット・デメリットを考察した上で実施すべきとしています。実施している他大学では年間約6.2トンの生ゴミを処理しているそうです。多くの人が賛同できるアイデアだと思いますが、科学的に正確な情報が必要という意見も出ました。

佳作となった行政政策学類4年今野翔太さんの「三者自治の理念に基づく学生と職員の交流にかんする提案」は、本学の学生と職員の意見交換のために開かれた場を設定するアイデアです。具体的には「意見箱」などを設置し学生の要望を随時受けつける、また交流行事などを開催し交流を図るというものです。本学の三者自治の理念を明文化した「福島大学憲章」を参照し、職員の「学生・教員がめざす学び、学問・研究への共感」にもとづいて実現すべきとしています。考え方はとても重要ですが対応策にもう少し工夫が必要なのではないか、という意見が出されました。

同じく佳作に選ばれた人間発達文化研究科2年久保田恵佑さんの「学生の進路実現に向けた学生主導型就職ワークショップという提案」は、学生の主体性を生み出し、学生が自立的に、協働的に就職活動に向きあうワークショップ型の就職ガイダンスの提案です。自身が本学で受けた就職ガイダンスを有意義であったとしつつも、講義形式で「学生の主体性」を考えたときに物足りなさを感じたと言います。具体的には、初期は講義形式のままでも次第に職種別のグループワークにシフトしていく、管理も学生に任せ、大学側は全体をファシリテートの役割を担い、先輩から後輩へと受け継がれる部活やサークルのように発展させたいと考えます。ユニークな提案ですが、一部実施されている、全体的に実施するとしたときに実現可能性はどうかなどの意見が出されました。

冒頭に述べたとおり、選外となった作品も含めて、学生の視点によるユニークな提言となり、結果的に今日の学生がどのようなことに問題意識を持っているのか、通常は知ることのできない実像に触れることができたことに満足しています。

本審査結果はホームページ上で公開すると同時に、提案された意見は学内で共有し、また関係部署に検討を依頼するなどの対応をとり、大学改革に生かしていきます。昨年度の入賞作は既に関係部署に伝えており、即実行に移すことは困難ですが、検討は続けられています。

次年度はさらに、多様な視点から大学に対して改革のアイデアを提案してくれることを望みます。